



【前回までのヒストリー】

感染症という未曾有のパンデミックにより、3回目の開催を予定していた札幌国際芸術祭（以下SIAF/サイアフ）も中止が決定した。SIAF ラウンジもまた、第二波、第三波という感染拡大の影響で、数ヶ月に渡り臨時休室を余儀なくされる状況にあった。しかし、休室という状況下でもできることがないかを模索し、その結果、フリーペーパーの制作など新しいことに挑戦する一年にもなった。

2021年春。前年12月から2月にかけて開催されていたSIAF2020特別編が終わり、次回の芸術祭に向けて準備を進めていく切り替えのタイミングとなった。SIAF ラウンジは依然としてパンデミックの影響下であり、感染拡大防止の要請により臨時休室になりやすいという、一進一退な状況ではあったが、昨年の休室期間に生まれたアイデアたちを徐々に実行へと移し始めてもいた。

実現期 再開後の展開

サイアフ・ ラウンジ・ ヒストリー vol. 09 2021 → 2022



この年にSIAF ラウンジが取り組んだ中で大きかったのは、やはり「SIAF ラウンジ オンライン^{※1}」であろう。これは、SIAF2020「ミニニケーションデザイン ディレクターである田村かこのディレクターが、2020年10月に立ち上げたブログラムで、コロナ禍で急速に普及したWEB会議ツールを用いて、参加者がインターネット上の仮想のSIAF ラウンジに集まって、アートにまつわるアレコレを気軽におしゃべりしてみよう、というものである。

2021年3月に田村ディレクターの任期は終わったが、次の芸術祭開催まで続けてほしいという田村ディレクターの思いを受け継ぎ、4月以降はSIAF事務局マネージャーの漆崇博がモデレーターを引き継ぐ形で毎月続けてきた。本誌が発行された現在、2023年5月時点で第31回目を迎える。

新たな展開として「SIAFふむふむシリーズ（以下ふむふむシリーズ^{※2}）」との連動によって、SIAF ラウンジオンラインが実施されたこともある。「ふむふむシリーズ」は、SIAF事務局の新たな試みで、SIAF開催年ではない年でも、田頃から美術作品をより楽しめるような機会を提供する鑑賞プログラムである。札幌市内美術館と協力し、展示作品を①「事前に知る」②「実際に見る・体験する」③「見た後に共有する」という3ステップ形式で実施していたものであるが、SIAF ラウンジオンラインでは、この内、③「見た後に共有する」というステップが行われ、学芸員やキュレーターなどをゲストに招いた上で、参加者同士で作品を見た感想をシェアし、理解を深めるといったことが行われた。

生憎臨時休室となってしまった期間には、配架書籍の紹介と、これまでSIAFの作品やプロジェクトに関わった方々に焦点を当てるといった2つの観点から、動画コンテンツ「SIAF ラウンジの本を紹介してください^{※3}」の制作・配信を開始した。

さらには、これまでSIAF2014、SIAF2017、そして中止となってしまうSIAF2020が蓄積してきた記録写真データを、来室者の方々がSIAFのアーカイブとして閲覧することができるよう、公開を前提としたデータの整理作業を行った。写真データは、1つのプログラムで撮影された写真が数百枚にのぼる場合もあったが、開催年度ごとに会場別を主軸として振り分けることにより、参加アーティスト自体を知らない層にも、身近な会場をフックとしてSIAFの周知へ繋がればと考えた。この号が発行される2023年5月現在も、室内のモニターディスプレイで自由に閲覧できるので、ぜひ気軽にご覧いただきたい。

さて、改めて振り返ると前年度のコロナ禍を経て、オンラインとオフラインを行き来するような試行錯誤が続いてきた。今でこそ感染拡大が落ち着いてきた様子が見られるものの、当時はいつまでこの状況が続くのか見当もつかなかった。しかし、この期間の試行錯誤は、今後のSIAF ラウンジの展開にも繋がる、意味のある経験であったことを確信している。

2021年度の冬には、新たなディレクターが発表となりSIAF2023-24へ向かって準備が進んでいく。SIAF ラウンジもまた、季節ごとの新メニュー開発や、saksakuの制作も継続しながら、試行錯誤の経験を活かした活動が展開されていくことになる。

SIAF ラウンジスタッフ 杉本直貴



※1 SIAF ラウンジ
オンライン



※2 SIAF ふむふむ
シリーズ



※3 動画コンテンツ
『SIAF ラウンジの本を
紹介してください!』



第9回テーマ

「アイヌと北海道」

アイヌ民族は、樺太や千島列島、北海道、東北地方北部に暮らしてきた先住民族であり、北海道の大地にはアイヌ文化が根付いているといえます。札幌国際芸術祭は、北海道で開催する芸術祭としてアイヌ文化やその創造性、伝統を守る人々を大切に考えており、これまでも様々な形でプログラムに取り入れてきました。今回はSIAFラウンジに配架されているアイヌ文化に関する書籍の中から、二冊の書籍を紹介します。

一冊目は、「アイヌもつと知りたい！くらしや歴史」。アイヌの人々が築き上げてきた伝統的な衣・食・住の様子や信仰の在り方、これまでの歴史などを学ぶことができます。イラストでわかりやすく解説されているので、子どもでも楽しくアイヌ文化について知ることができそうですよ。また、ページに印刷されたQRコードを読み取るとアイヌの詩や楽器の演奏、アイヌ語による物語を聞くこともでき、本物の音、声に触れます。

二冊目は「AINU ART―風のかたりべ」です。本書は平成24年度アイヌ工芸品展「AINU ART―風のかたりべ」の開催に際して発行されたものです。アイヌの伝統的な道具、衣服等のコレクションや、アイヌの伝統的な文様、木彫りの技術を取り入れた現代作家の作品などが多数収録されています。丁寧に施された刺繍、木彫りなどの造形の美しさが大型本で堪能できるほか、コラムも複数掲載。アイヌの創造性の背景にある精神、信仰の心を感じさせる一冊です。

今回は、アイヌ文化に関する二冊の本を紹介しました。私たちの暮らす北海道にはアイヌの文化が根付いており、アイヌにルーツのある人々が現在も暮らしています。こういった文化に触れ、学んでいくことは日本・北海道で暮らしていく私たちにとって重要な視点を与えてくれるように感じます。



北原モコットウナシ、養島栄紀 監修『調べる学習百科 アイヌもつと知りたい！くらしや歴史』（岩崎書店）



北海道立近代美術館、アイヌ文化振興・研究推進機構 編『AINU ART―風のかたりべ』（アイヌ文化振興・研究推進機構）

坂本龍一

ゲストディレクターと

SIAF2014

札幌で行う初めての国際芸術祭「SIAF2014」が開催されたのは、今からもう9年も前のこと。その初代ゲストディレクターを務めたのが、故坂本龍一さんでした。初の芸術祭には、さまざまな場面での今後の芸術祭の基盤ともなる構想が必要とされており、そこでまず、芸術祭を通じてこれからの札幌の都市と自然の共生を考える「都市と自然」というテーマが、坂本ディレクターの手によって設定されました。

SIAF2014に向けて札幌の視察が行われていた頃、ここ札幌市資料館は耐震化に伴う改修工事が検討されており、そのことを聞きつけた坂本ディレクターは、今後の札幌市資料館の用途をみんなで考える「札幌市資料館リノベーションアイデアコンペティション」を発案。同時に、自らも「会期中、ここ（札幌市資料館）に人々が集うカフェとバー空間を作りたい」とリクエストしたことから、今SIAFラウンジの元となる「SIAFカフェ」が誕生したのです。その背景には、SIAF開催の推進力である「創造都市さっぽろ」の拠点を作りたいという坂本ディレクターの思いもあったといえます。

SIAF2014の運営では、「市民自治」の考え方を大事にしたかったという坂本ディレクター。その思いを反映してか、SIAF2014の会期中は、「アートカフェ・ゴ・資料館」というボランティアの活動も無く芸術祭本番が開催されようという間際に、自身の癌が発覚。その療養のため、来札を断念していたからです。

芸術祭終了から一年が経過した頃、病状の回復とともに再び札幌を訪れた坂本ディレクターは、改めてボランティアの方々にぜひ会いたいと、会期後も行われていた「アートカフェ・ゴ・資料館」にシークレットゲストとして登場。SIAF2014の様子について参加者に尋ね、一緒に談笑するひとときを過ごしました。



SIAFラウンジとわたし。

元 SIAF ラウンジスタッフ 笠田大介

札幌の中心部を東西に延びる大通公園の西端にある「札幌市資料館」。噴水や花によって彩られた大通公園を抜けて近づいていくと、それがかなり古い建物だということがわかります。重厚な扉を開いてステンドグラス越しの光が上から差し込む螺旋階段を目前に左へ曲がると到着。SIAFラウンジがありました。大学3年の夏、友人がアルバイトをしているというSIAFラウンジに遊びに行った私は、窓から見える景色をひと目見て好きになり、その年の冬からアルバイトをさせてもらうことになりました。カフェや書籍整理の仕事は楽しく、また、アートにほとんど縁のなかった生活をしていた私にとって日々入ってくる芸術関連の情報は刺激的で、徐々にアートに対するイメージを変えてくれました。「創作活動」だけではなく全ての「表現」がアートに成り得るという感覚を持てたことでとても身近なものに感じられたのです。

私にとってSIAFラウンジは、アートをより身近なものとして楽しめる機会と素敵大通公園の景色をコーヒーと共に味わえる唯一無二の場所です。



Caféの
ちょっと
いい話？

通常とは違うけれど…
食べやすさのために、
ラウンジがしていること。

紅茶のお供にはもちろん、朝ごはんにも、ちょっと小腹がすいたときにも。「スコーン」はいつでもお腹を満たしてくれる魅力的な食べ物です。SIAFラウンジのカフェでも定番となっていて、手づくりのフルーツジャムを添えたり、ザクザクっと刻んだチョコレートを入れたり…これまでさまざまな味わいが登場しています。スコーンといえば、手で割ってガブリと食べるのが一番美味しいのですが、SIAFラウンジでは「手にちょっとくつつくかな？」という素材を使ったときは、あえてフォークもいっしょにお出しすることがあります。